

平成23-25年度科学研究費補助金、基盤研究(C)

課題番号23520615

研究課題「日本生育外国人児童のリテラシー発達に関する基礎研究-日本語作文の縦断調査-」

研究代表: 齋藤ひろみ(東京学芸大学)

日本生育外国人児童の「表記の力」の縦断調査

東京学芸大学国際教育センター 菅原雅枝

1. 研究の目的と対象児童

目的: 日本生育外国人児童の表記の力の発達過程の特徴を記述する。

対象: 日本生育外国人児童(F)33名中31名は日本生まれ、2名が幼少期来日。いずれも日本語の音声面では日本人児童(J)と変わらないレベルである。

2. 分析手順

1. 作文から表記の誤りを抽出

本調査で「表記の誤り」とした例は以下の通り。

学校え行った / かわいいかった / はして(走って) / ゆった

2. 量的に分析

① 文字種ごとに誤りのタイプを分類

例 : おかさん = ひらがな・長音・脱落

レモン = カタカナ・選択・平→片(文字)

② 各作文の有効文字数を基に「誤り出現率(以下、出現率)」を算出

③ 全体、文字種別、誤りのタイプ

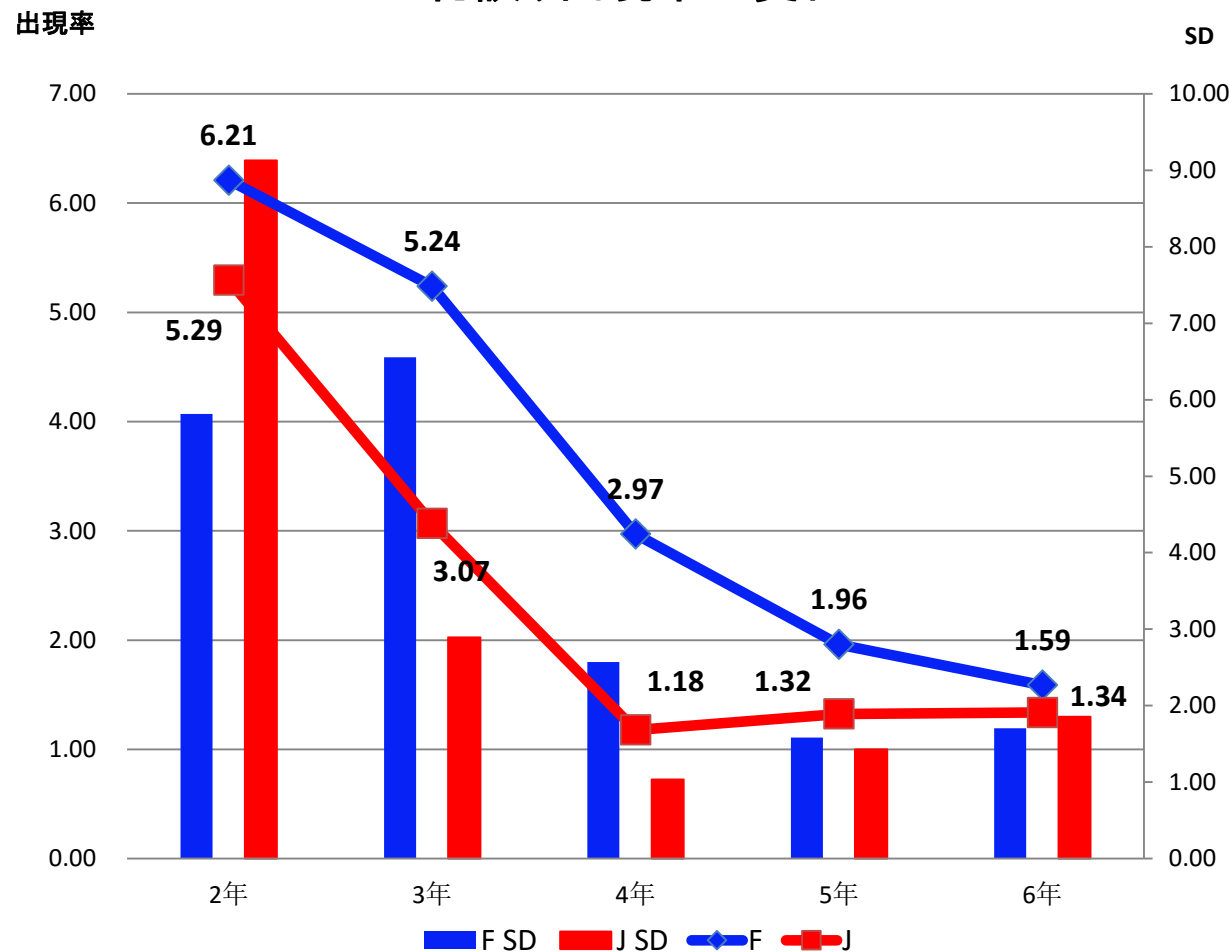
「濁/半濁音、特殊音」「文字・文字種選択」に着目

FJの比較・学年による変化を分析

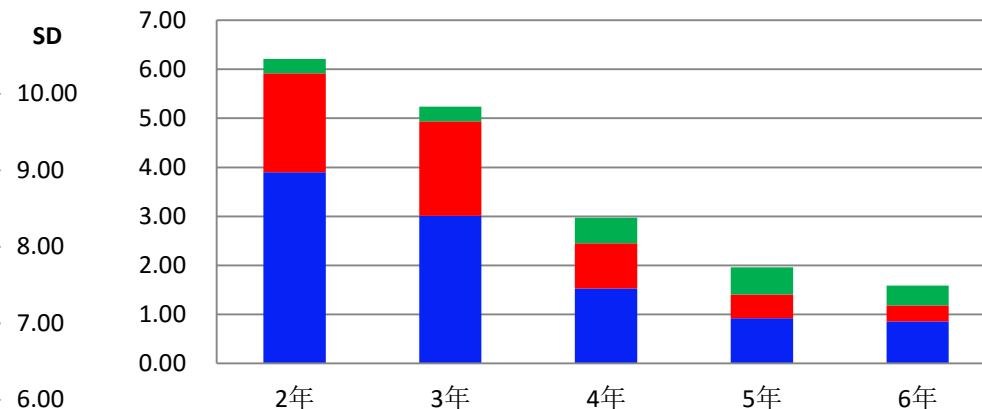
3. 質的に分析 : 誤りの多い児童の個人内の質的な変化を記述

3. 量的分析: 結果① 全体の傾向と文字種別の傾向

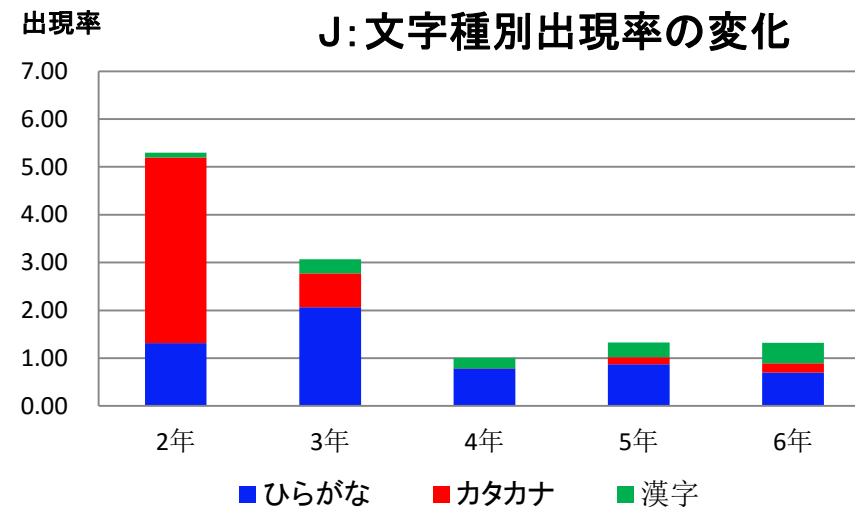
総誤り出現率の変化



F: 文字種別出現率の変化



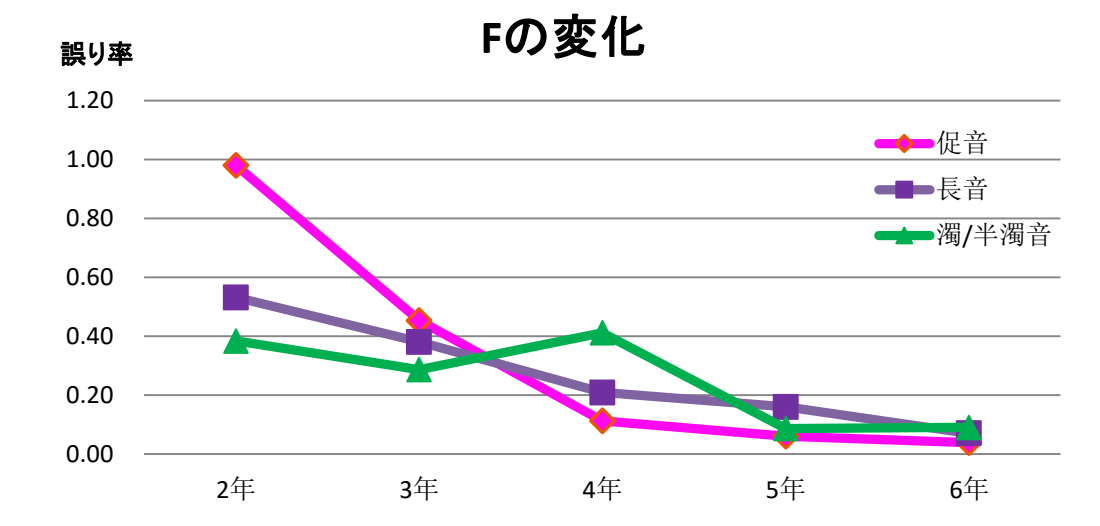
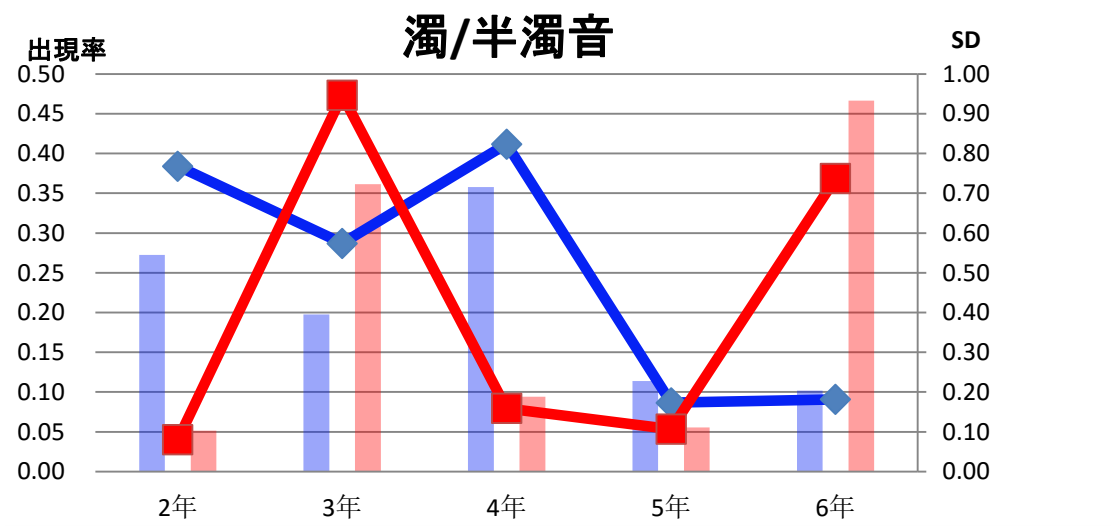
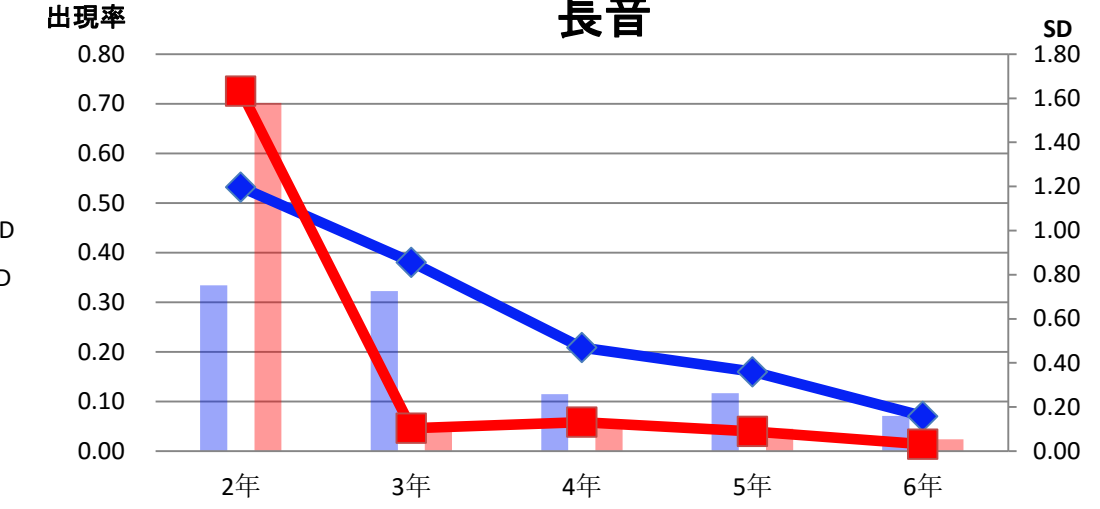
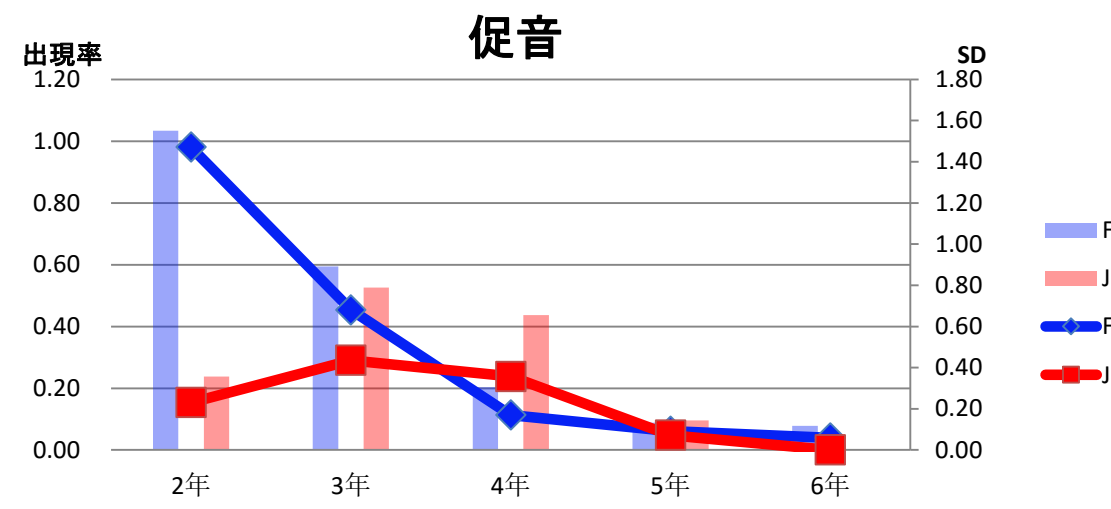
J: 文字種別出現率の変化



- ・表記の正確さは、Jは4年で安定する。Fは6年間かけて正確さを身につけていくが、誤り出現率はJより高いままである。
- ・Jは2年、Fは2～3年にかけて、表記の正確さに個人差が大きい。
- ・Fの2年時のひらがなの誤り出現率は、Jの3倍である。

結果② 濁/半濁音・特殊音の誤りの傾向

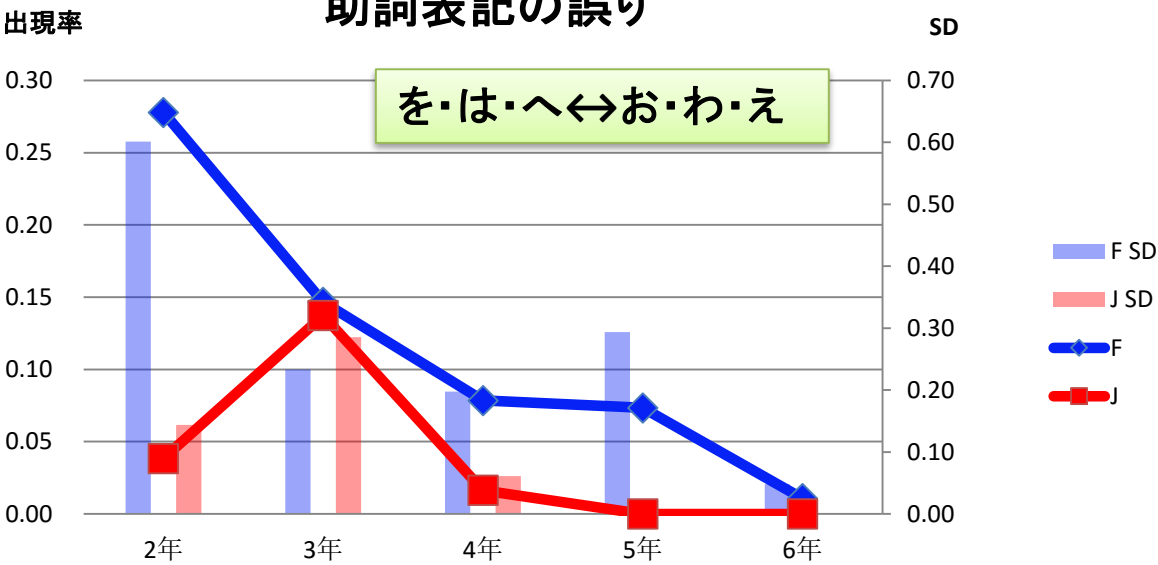
※撥音・拗音は誤りの実数が少ないため割愛した



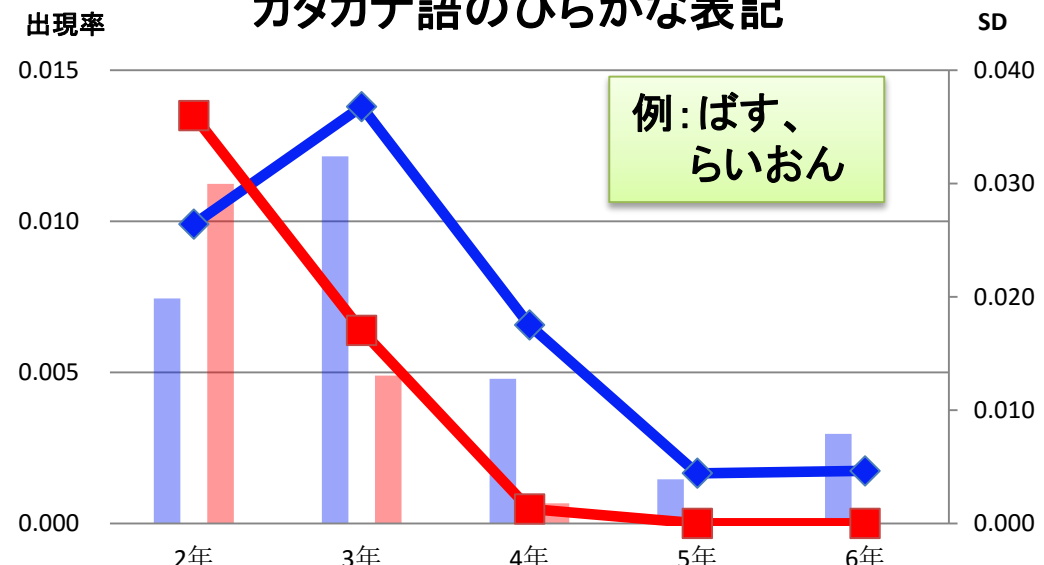
- ・F: 促音は4年でJとほぼ同等になる。長音は学年と共に誤りが減るが高学年でも誤りが残る。濁/半濁音は5年で安定する。
- ・J: 個人差の大きい学年を除き、誤りの出現率は高くない。
- ・Fにとっては促音→長音→濁/半濁音の順に容易。

結果③ 文字・文字種の選択の誤りの傾向

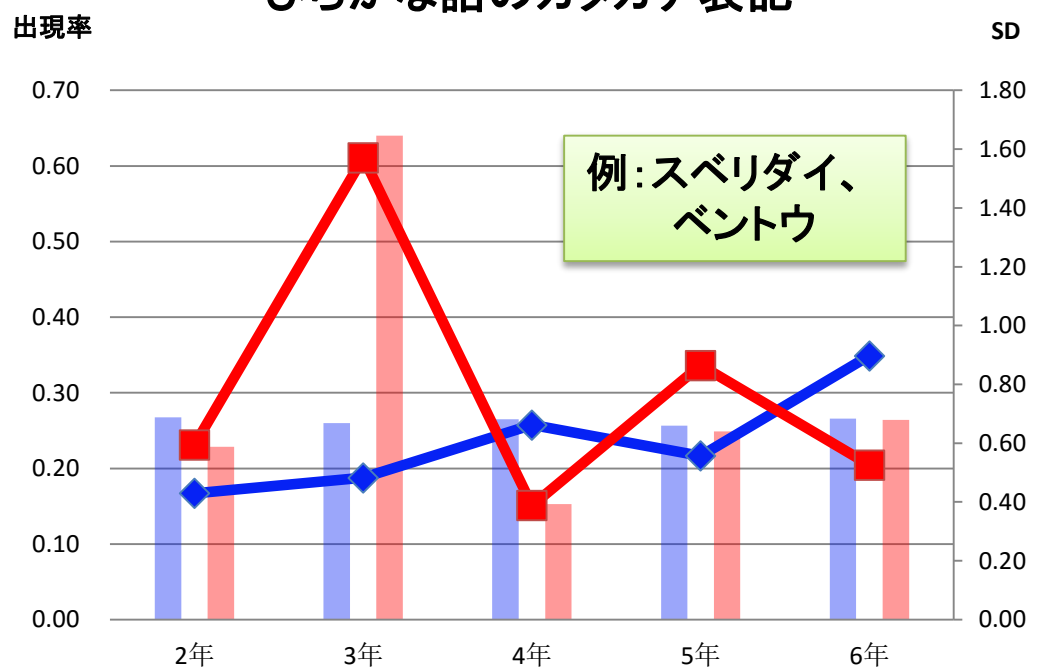
助詞表記の誤り



カタカナ語のひらがな表記



ひらがな語のカタカナ表記



- ・Fの助詞表記の誤りは5年まで残る。
- ・カタカナ語をひらがなで表記する誤りはJは4年でほぼ見られなくなるがFは高学年にも見られる。
- ・Fのひらがな語をカタカナで表記する誤りは学年と共に増加傾向。
- Fはある単語をひらがな・カタカナどちらで書くかの判断に課題

4. 質的分析 ケース①:F1(ベトナム)

内訳	かな(平/片)							漢字	合計	有効文字数	誤り出現率
	特殊音			濁/半濁音	文字種 平→片	助詞選択	その他				
	促音	長音	撥音								
2年	15	3	6	2	4		9		39	251	15.5%
3年	4	3	2	3	5	1	10		28	273	10.3%
4年		5		14	29	1	12	16	77	701	11.0%
5年		1		1	4	4	1	3	14	331	4.2%
6年				1	17	1		6	25	380	6.6%
合計	19	12	8	21	59	7	32	25	183	1936	9.5%

特殊音の表記は順調に正確さを増す。濁/半濁音、文字種の選択に課題がある。

カタカナ語のひらがな表記(のべ単語数)

学年	正	誤(単語)	誤(文字)	合計	単語誤り率
2年	0	1	2	3	33.3%
3年	4	0	2	6	0.0%
4年	8	8	1	17	47.1%
5年	3	1	0	4	25.0%
6年	4	3	0	7	42.9%

誤った単語: すたんぷ(2年)、しよお/しよ、じゃんぷ、けえき、きす、かくれくまのみ(4年)、ろうらあ(5年)、あすれちっく(6年)

濁/半濁音

学年	正	誤	合計	誤り率
2年	40	2	42	4.8%
3年	29	3	32	9.4%
4年	88	14	102	13.7%
5年	39	1	40	2.5%
6年	29	1	30	3.3%

【特徴】

- ① カタカナ語は4年で基本的な語の間違いや見られる。高学年では単語内の平・片混用はない
→ 課題は「単語をどちらの文字種で書くのか」
- ② 助詞(は)の選択の誤りが5年で増加。
2、3年時には正確に表記。
→ ケアレスミスの可能性
- ③ 濁/半濁音は4年で誤り数が増えるが、
5年からは落ち着く。

ケース②: F2(ベトナム)

高学年になっても減少しない、急が増える項目がある。

内訳	かな(平/片)								漢字	合計	有効 文字数	誤り 出現率
	特殊音		濁/半濁音		文字種		助詞選択	その他				
学年	促音	長音	拗音	撥音	平→片	片→平						
2年	7	3	2		3	3			2	20	141	14.2%
3年	9			1	1	4		1	7	24	253	9.5%
4年	4	2		1				1	2	12	263	4.6%
5年	3	4			1				23	39	691	5.6%
6年	8	1			1		6		21	48	1090	4.4%
合計	31	10	2	2	6	7	6	2	55	143	2438	5.9%

促音					
	学年	正	誤	合計	誤り率
促音全体	2年	0	7	7	100.0%
	3年	2	9	11	81.8%
	4年	2	4	6	66.7%
	5年	18	3	21	14.3%
	6年	19	8	27	29.6%
語の一部	2年	0	2	2	100.0%
	3年	1	0	1	0.0%
	4年	0	0	0	0.0%
	5年	3	1	4	25.0%
	6年	4	6	10	60.0%
活用形	2年	0	5	5	100.0%
	3年	1	9	10	90.0%
	4年	2	4	6	66.7%
	5年	15	2	17	11.8%
	6年	15	2	17	11.8%

【特徴】

*上表では「その他」に該当

- ①促音: 学年を問わず誤り出現
 - ・活用に伴う促音の誤りは徐々に減少
 - ・6年で「いかい(1回)」「いぱっい(いっぱい)」×2回
- ②長音の誤り
 - きょうねん(6年)、スクールゾン(5年)、おかさん(4年)
- ③単音の選択*: 高学年でも出現
 - いぞいぞ(いよいよ)、うかいます(むかいます)、ときやく(とうちやく)
- ④形容詞語尾の「い」余分*: 5、6年でも出現
 - かわいかった、おいしいそう、たのしいみに 他
 - ☆正用:「たのしかった」×2、「まぶしかった」
 - 日本語を表記する際の「音」と「文字」の対応に課題

ケース③: J1

内訳	かな(平/片)					漢字		合計	有効 文字数	誤り 出現率
	特殊音	濁/半濁音	文字種	助詞選択	その他					
学年	促音	長音	拗音		平→片					
2年	1	1			8		5	15	286	5.2%
3年	24	2		8	18	5	3	61	827	7.4%
4年	32	1	7	4		3	1	48	1314	3.7%
5年	4	1	1				2	10	378	2.6%
6年	1		2		1		11	19	837	2.3%
合計	62	5	10	12	27	8	22	153	3642	4.2%

促音

学年	正	誤	合計	誤り率
2年	10	1	11	9.1%
3年	21	23	44	52.3%
4年	15	32	47	68.1%
5年	10	4	14	28.6%
6年	45	1	46	2.2%

動詞の活用に関わる促音誤り:
 3年15件(誤りの65.2%)
 4年24件(同75%)

拗音

学年	正	誤	合計	誤り率
2年	1	0	1	0.0%
3年	3	0	3	0.0%
4年	22	7	29	24.1%
5年	3	1	4	25.0%
6年	6	2	8	25.0%

拗音の誤り例

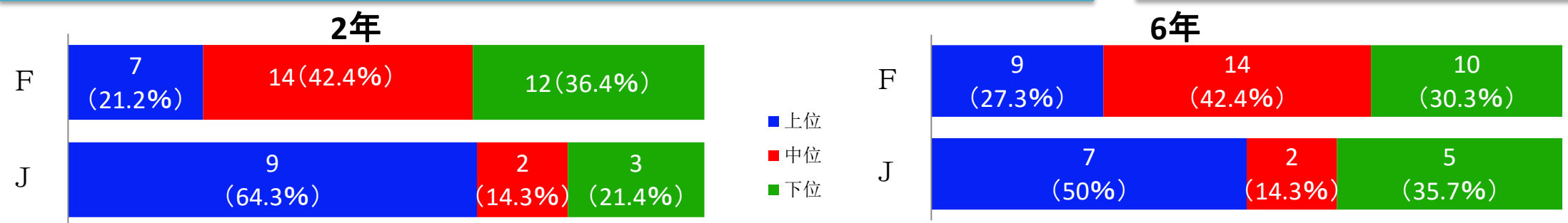
4年
 しょぱつ(しゅっぱつ) × 2、
 ジョンプ(ジャンプ)、
 でんしょ(でんしゃ) × 4
 ☆正しい表記1回あり
 5年 じょんちょう(じゅんちょう)
 6年 プロジェクト(プロジェクト)

【特徴】

- ①促音: 語形変化に伴う促音表記の誤り率が3年~5年で高い。
- ②濁/半濁音、助詞の選択の誤り: 3年、4年にのみ出現。
- ③拗音の誤り: 4年以上で出現。正しい表記との混在も。
 → 日本人児童全体の傾向よりも表記の力の発達が遅いケース。
 作文量との関係も?

5. 2/6年時の「表記の力」上・中・下位群割合

人数：F33、J14 計47人



FJの人数割合(F:J=7:3)から考えると、2年の上位群には圧倒的にJが多い。6年では若干の増えるものの、割合としては少なく、Fは表記の正確さにおいて、6年になってもJに追いついていないと考えられる。

6. まとめ

正式な文字学習は、就学後に始まる。しかし、2年の段階ですでにFJ間に差がある項目も見られる。Fは、Jに比べ表記の正確さの獲得のスピードは緩やかで、特に濁/半濁音や長音、単語の文字種の選択はFにとって困難と言えそうである。ただし、習得の過程、その特徴には個人差がある。

日本生育外国人児童の表記の力の発達を支えるためには、①就学段階でのFJの差を小さくする手立て、②Fの発達の特徴を踏まえた明示的・継続的指導などが必要と考えられる。